

ジバロスのタニア

その日、ジパロス族の村の周囲には朝早くからボグサ族の戦士たちが取り巻き、盛んに奇声をあげてジパロスの村人を怯えさせていた。村おさのイーコンは、来るものが来た！といったような醒めた表情でタニアを呼んだ。彼らの要求は分っている。タニアだった。もちろんタニア自身も知っていることだ。

昨夜までにイーコンは彼女にそれを納得させた。タニアもしぶしぶながらそれを受け入れねばならない状況だった。タニアは彼らの一族が棲む大きな共同家屋の、女性が寝起きする場所にいたが、村おさの呼ぶ声に応え立ちあがって彼らの居る場所へ歩いていった。

ジパロス族は近隣の多くのインデオ同様に衣服を着けない。成人の男はわずかな草葉で股間を隠すが女は素裸だ。屋内に居る住民たちの誰もがいつせいにタニアの美しい全裸の立ち姿を、その横顔、綺麗な金髪の長い髪、女らしい痩せた姿へ視線を向けた。特に男たちの何時もの彼女への親しみをこめた優しい視線は更に、恋しいものを切に見詰めるような真剣さを加えていた。そして彼等の目が美しくなった乳房の片方の変容に気がつくとき悲しみの表情に変わった。

彼らは知っていた。彼女の姿はこれで見納めになるのだ。女たちで

すら今朝は多くが悲しみの表情を見せていた。いつもなら彼女の挙動を無視することが多かったのだ。

タニアはこの数日臥せっていた。ボグサ族との最近の戦いで胸に矢を受け、その毒で倒れたのだ。しかし、その死ぬしかないといわれたボグサの強烈な矢毒もタニアを数日苦しめただけで、今日は立って歩けるまでに回復している。

タニアは強い。皆は認めている。部族内で一番大きいイーコンよりもむしろ背が高く、女らしいままに立派な体格だったし、何よりも勇気があった。彼女は十八になって、部族の女としてはじめて戦士として男たちに加わり密林に入ったのだ。近隣の部族の間でも珍しいことだった。ジバロス族はボクサ族との戦いの中で戦士を何人も失っていたし、タニアはそれを補うために進んで戦士になったのだ。それもボグサ族の恨みを買う一因になったのかもしれない。

都合半年にも及んだボグサ族との闘いの間、彼女の矢で敵の何人かが傷ついたことは確かだ。けれど、戦い自体は圧倒的にジパロスの劣勢だった。実際、彼らとの戦いで仲間五人が死んでいる。その中にタニアの前の夫だったイーコン、今の村おさの父がいた。息子は習慣からタニアを自分の妻として引き継いだ。父は四十五くらいだ

ったろうか。息子は三十にはなっていない。老人と行ってよかった父イーコンは隣村シケロスに来たタニアを見て、欲しいと思い、戦いもせず譲り受けた。それから一年と半年が経っていた。タニアはこの村で二人の夫に仕えることになったのだけれど、それももう終わりだ。

タニアはジパロスとボグサとの休戦協定に含まれる条件として向こうから要求され、彼らに身柄を渡されることになったのだった。タニアはボグサ族に好まれたのだろうか。それとも彼らとの戦いの中で恨みを買ったのだろうか。それはどっちともいえなかった。

確かにタニアはこのアマゾニア深部、ボリビア国境にも近いアモレ川支流の多くの部族にその名前を知られ、部族間の争いの元にもなった女だった。いくつもの部族の首長がタニアを欲しいと言い、奪い合い、結果として彼女は転々と各部族間を移ってきた。少なくとも五人の夫の妻を経験してきた。それらの中には彼女自身の意思で村を出、別の部族に入ったこともあった。それらのことはこれまで近隣ではまったく前例のなかったことだったので、彼女のことを良く言わない部族もある。確かに原始的な裸族である彼らにも貞操の觀念はあり、結果的にしろ夫を何度も替えた女は軽蔑されたのだ。

何にせよ、タニアは特別な女だった。鉱山技師だったアメリカ人の娘で、父母が揉め事で仲間に見殺され、現地の部族に引き取られたのが十三の時だった。それから五年以上が経っている。文明人の家庭で育てられ、十三の時に突然現地人の部落に生きる身となったタニアが時を経ず着ていたもの全部を欲しがった首長に遣り、その土着民の生活になじんだただけでなく、彼らも驚くほど密林の自然に溶け込んでいったのは不思議だったけれど、その生来の健康、体力が彼らの間で抜きんでていたことも幸いしたに違いない。

実際、文明世界からこの地方へ入ってくる人間たちの多くがこの地の悪疫猖獗に苦しんでいのちを落とす。生来の文明人である彼女がしかも土着民と同じ生活に入って病気もせず五年以上も元気で生きているのは奇跡とも言えた。

そしてイーコンは自分の座に座ったままそんなタニアが正面に立ったのをつくづく眺め、ボグサ族などには渡したくない、と切に思った。父親が死んで自分のものになったタニアだったが、その後もボクサ族との戦いが続き、彼女とは夫婦らしい生活をした記憶に乏しい。この共同家屋では村おさといえども夫婦の営みはできない。家を出て森の

中で睦み合うのだが、ボグサとの鬪いがそういった日常を困難にしていた。もちろん生活の困難はそればかりではない。村人たちの普段の水汲みもままならないし、周囲の作物の畑も荒れ放題だ。困窮がジバロス族を追い詰めていた。ボグサ族の要求を呑んだのはそういったこともあったのだ。しかし、そのような部族の苦しみを一身に負って村を出るタニア自身は涼しいような表情を作って、もう覚悟を固めた様子だった。

この女が、あのけだもののようなボクサの集団に入っているのか、と思うとイーコンはやりきれない気がした。彼らはいまなお食人の習慣を捨てては居ないし、タニアを女として欲したのならともかく、敵の戦士として認め、恨みを忘れていないのなら、彼女の先行きの運命は悲惨だった。タニア自身、この要請に気が進まなかったのもその懼れを思ったからだろう。しかし、今、タニアは自分のことよりもこの、ジパロスの村のひとびとのことを思っこの決断をしたようだった。この一年余、彼女を生活の場に容れてくれ、生かしてくれた集団の家族。もちろん、彼女にやさ

しかつたとはいえない彼らではあつたけれど。

「おまえ、怖くないのか。」

「ええ、ちよつと怖い。」

「そうだろう。最近まで殺し合いをしてきた相手だ。だが、やつらはおまえを大切にするだろう。心配はない。」

そういいながら、イーコンは妻だった女の、彼もよくなぶつた右の乳房を陰しい目で見た。昨日まで寝込んでいた原因だった。ボグサ族の毒矢の傷で形を変え、半ば崩れている。まだ痛むのだろう。しかし、死ななかつただけでも良かった。顔色はまだ良くないが、仕方がない。

タニアはジバロスの女たち同様ここに来る前から素裸のままだったが、彼女だけはその胸に見事な首飾りを掛けていた。父親のイーコンに貰った特別のものだった。病床にあつてもずっと掛けたままだったそれを、息子の視線に応じて外し、返そうとした。なかなかの値打ちのものだったし、ここを出て行くのなら返すのが道理だった。息子はそれを手に持ってわずかの間考えていた。これは鬩いの時ボグサが見ていたはずだった。タニアが着けたまま行くのが

彼女のためにもいいかもしれない。しかし、結局イーコンはそれを収めた。

外からは一段とボグサの罵声、何かを打ちたたたく音がひどくなった。

「もう、いきます。」

タニアは座ったままのイーコンの顔をじっと見つめた。夫として彼とは三カ月間過ごしたただけだったけれど、やはり愛情は通じているのだった。イーコンが両手を広げて、彼女が差し出した手を掴んだ時、彼女の蒼い顔に赤みがさした。しかし一瞬だった。彼らインデイオの愛情表現は淡白だった。イーコンは座ったまま、タニアを見送ることはしなかった。すぐタニアは厚めの唇を引き締め、小屋の出口へ歩いていった。誰も声をかけるものはなかった。

どこの部族でもそうだったけれど、タニアはいつも浮いた存在だった。言葉の問題があったし、その容姿容貌が彼らとずいぶん異なっていることもあったろう。そしてタニアの肌は彼らの間では異様なほどに白かった。大抵は首長やら村おさの妻にされたことから他の女、ことに同じ立場の女たちからは陰湿ないじめを受けることも多

かった。今度のことも、彼女が出て行くことで露骨に喜ぶ女たちは多かった。タニアもおだやかではなかった。私はこの部落のためにひとり、いわば犠牲となって敵の部族に売られるのだ。もっと感謝されてもよかったのだ。しかし、一段と騒がしくなった外の様子に、出口近くで躊躇する様子タニアに向かって男のひとりが声をかけた。

「よう、タニア、ボグサのやつらにたんと可愛がってもらえ、な。」
悪意のある言葉ではなかった。確かに強いボグサに対するジバロス族の恭順のしるしとして捧げられる生贄であるタニアが、彼らからどんな扱いを受けるのか、もっとも楽観的な思いを男はタニアに言っただけを勇気づけたのだろう。しかし、それであっても、タニアがずっと彼らについて聞いてきた噂、知識からはまったく勇気づけられるというものではなかった。

決まった家屋、棲家を作らず、一年中密林間を放浪して生きるボグサ族の戦士たちの、彼らの家族、女に対する扱いは、基本的に性奴隷といったようなものだった。多くの部族から略奪されてきた女たちは様々な部族、種族から構成されていた。白人はタニアが初めてだったが、彼女だけが特別扱いされることがあるのだろうか。もち

ろん、この美しい生贄は、強い戦士でもあつたし、彼らが欲したら、彼女は虐殺され、骨を残して食い尽くされる運命だった。生け捕りにされた男たちは例外なくそうされていたようだった。

男のかけた言葉でタニアは意を決め、目の扉を開けた。強い日差しにちよつと目がくらんだ。タニアは背中から強く押し出され、後ろの扉が閉まった。タニアは一人立ち尽くした。すぐ周囲にわらわらと真っ黒い小柄なボグサの男たちが取り囲んだ。彼らはジバロスの戦士とは違い股間の提げものもなく全裸のままだった。他の部族から忌み嫌われる理由のひとつだった。

戦士だったタニアにもここまで近くで彼らを見、見られるのは初めてだった。思っていた以上に醜い、とタニアは思った。正面の腰が曲がった老人に近い男が彼らの首領格のようだった。くぼんだ小さな目を光らせてタニアの体をひとわたり眺め、不満そうに言った。タニアにもおおかたは理解できる言葉だった。

「なんだ、汚い体ひとつに、何の贈り物も持ち出しては来なかったのか。話しが違う！」

タニアは不快だったけれど、何の反論もしなかった。彼らインディオはずいぶん計算高く、交渉が強引だった。いずれタニアには知っ

たことではない。しかし。「汚い体」にはこだわった。長く自分の腐った右の乳房を見ていたようだから、このことをいつているのだろう。何の不满があるのか。彼らがやったことなのだ。更に何か言っている。

「おまえは敵の戦士としてもずいぶんわれわれを困らせた。戦士の捕虜は普通なら死刑だ。だが、ジパロスの言い分を聞いてここから立ち去るかわりに貰った。勝手に来たおまえはこれからはわたしのものだ。わたしの、ボグサの女として生きるのだ。だが、逆らったらすぐ殺す。敵の戦士はわたしの食い物にもなるんだ。このことを忘れるな。」

殺されることは免れたらしい。しかし続いて男が言った言葉はタニアには理解できなかった。尻を見せろという。

タニアは眉をひそめたまま無視していた。男は怒った。反抗的だというのだ。タニアは言われたとおりに男に背を向けた。次に前を手をついて四つんばいになれという。タニアはしぶしぶながらその通りにした。しかしすぐ後ろから腰を抱えられて強姦される予感にタニアは驚愕し、転がって逃れた。すぐ周囲から足蹴りが襲った。しばらくは転がりまわって防いだけけれど、多勢の前にはかなわなかつ

た。何度も腹を蹴られ、叩かれ、疲れもあつてとうとう手足をつかまれ、地面の上に押し付けられた。後ろ手に括られた。事態は最悪に近かったけれど、タニアは諦めては居なかった。敵の男に、自分の部落の中で昼間、堂々と辱められるという酷さ悲惨さを彼らはタニアに強いることで自分たちの力をジパロスに誇示しようとしたのだろう。

ともかくタニアの気丈な抵抗をちからでねじふせ、彼らは言ったことをやりとおした。タニアはうつぶせに尻を高く突きあげた屈辱の姿で次々に男たちの陵辱を受け入れることになった。後ろ手に括られたままで、周囲からの手指の介助もあつてさまざまな姿勢が試された。タニアが辛かったことは、多くの攻撃が肛門になされたことだった。多分、彼らの身分によるものだろう。タニアの意識がはつきりしていた内になされた正常な攻撃の、もつとも激しいものはあの正面に居た老人のようだった。いずれ、私は彼のものになるのだろうか。もちろん彼女を見放したジパロスの小屋から彼女の窮地を救おうとするものはなかった。何処かから見詰めているのだろう。そんな気配もなくはないけれど、あくまでしん、と静まり返ったままだった。せめてもの抵抗としてタニアは極力声を出さなかった。

自分を見放したジバロスの者に対する意地もあつた。しかし治りきらない右の乳房をわざと揉まれた時はどうしようもなく悲鳴をあげた。

昼近くまで続いた生贄のみじめな陵辱の儀式はそのときまでに意識を失つたようにぐったりした女を手荒な方法で蘇生させ、首に縄を絡ませて、ジバロスの大きな家屋の周囲を一回り引きまわしてから終わった。そのあと彼らは生贄の手足を前でひとつに括り棒に通して吊り上げ、意気揚揚と密林へ引き上げていった。

イーコンは彼らが去つたあと、彼女が辱められた場所の近くでひとつの長い金髪の束を拾つた。タニアについての噂はばつたりと途絶え、イーコンはその髪を長く大切にした。

終わり